

佐藤友彦師所蔵 九冊本間狂言「詠之類」

飯塚 恵理人*

要旨

この九冊本からなる間狂言本は、現在和泉流狂言方佐藤友彦師が所蔵されているもので『国書総目録』第六卷「能の本」の間狂言の本に山脇元康氏所蔵として載るものであり、以前に故表章氏が御覧になった際、「内容的には大蔵流のもので、貞享松井本、筑波大
学本と並び、大蔵流の間狂言本として最古に属する内容ではないか。」と筆者に言われたことがある。この間狂言本についてはすでに第五冊まで翻刻しており、今回第六冊目の翻刻を掲載させて頂く。内容に関する吟味は後日とし、とりあえず本文を翻刻・紹介させて頂きたい。

(凡例)

底本に忠実に翻刻することを心がけたが、読解の便宜を考え、以下の点について改めた。

- 1、旧字体は原則として新字体に改めた。
- 2、私に句読点を施した。
- 3、能の曲名は《》で囲んだ。

- 4、底本の書き入れは（）で囲み、その書き入れの該当部分に示した。

- 5、底本の墨消ちとなっている部分は【】で囲んだ。

「詠之類」

(目次)

- (目録) (126) 《殺生石》 (127) 《世界》 (128) 《車僧》 (129) 《大佛供養》 (130) 《現在鶴》 (131) 《羅生門》 (132) 《土蛛》 (133) 《長郎》 (134) 《二人祇王》 (135) 《守久》 (136) 《橋弁慶》 (137) 《大原御幸》 (138) 《鉢木》 (139) 《摂待》 (140) 《鶴亀》 (141) 《皇帝》 (筆者注: 《皇帝》は本文にあるが目録にはない。注記として載せる) (142) 《鞍馬天狗》 (143) 《夜討曾我》 (144) 《大会》 (145) 《舍利》 同

(本文)

(126) 《殺生石》

御いそぎ候程に、是ハはやなす野の原に御付にて候。ありや
くく。あの大せきのほとりゑ鳥がふらくとおちて候が、きど
く成事にてハなく候か。いや何事やらむ申候。扱もく只今の女ハ

物すごいことかな。いかに申候。只今の女ハ色／＼の事ども申て候が何とやらん物すさまじきにてハ候ハぬか。是ハきどく成事を御尋被成候。左様の御事ハさだめて御存じにて、御ざあらうすれども御なぐさと思召、御尋なさるゝと存候間、かたはし聞及たるとおり物語申さうするにて候。いにしゑ鳥羽の院の上わらハに、玉もの前と申女の御さ候つるが、何ゆゑかの女を玉もの前とわ名付給ふぞと申に、何方より見申せどもいつくしき女なり。惣而玉ハうらおもてなき物なれハそれによそゑて玉もの前とハなづけられたると申。其子細ハ一とし御門に御哥合有てのちくわんげんすぎにわかにあめふりらいでんしてゑいそのごとく成風ふき殿中にとぼしび一とうもなし。其時玉もの前が身よりひかりを出し禁中をてらしけれハ玉もの前ハ人間にあらずとてけしやうの前とハつけられたり。御門其ひかりをゑいらん有てより御のふしきりに有しかハ貴僧高僧をしやうじしゆ／＼さま／＼の御祈禱どもにて候へども其しるしさらになし。あべのやすなりをめし、うらなわせられけれハ。やすなりうらかたに引合申候ハ。是ハ只玉もの前のしよぎやうなり。御きたうなくてハかなわじとてだんに五色のへいをたてやくしのはうをおこないけれハかなはじとや思ひけん下野の国なす野の原におちてゆく。こくないつうの者なれハおよそにしてハかなはじとて三うらのすけかづさのすけりやうすけにおほせつけらるゝ。りやうすけおほせうけ給ハつてなす野のはらに下ちやくして犬ハきつねのさうなれハ犬にてけいこ有べしとて百日犬とぞさだめける。百日にまんする日大き成きつねやさぎにあたつてしすれハ御門の御のふもなをらせ給ふ。猶をも其しうしん大石と成て此程辺におめて殺生をいたすと申が扱ハあの石ハうたがひもなき殺生石にて御ざあらうするか。たゝし何と思召候ぞ。扱ハ左様の子細により御尋にて候か。かやう

の事もじやうぶついたし度存すがたをあらハしたると存る間、かの石をかつして御とおりあれかしと存候。さあらハ此ほつすを参らせうにするにて候。

(127) 《世界》

か様に候者ハひゑい山いむろの僧正のぼうに仕ゑ申能力にて候。去程に只今此くわんじゆをもつて都ゑいそぐ。其子細をいかにと申に大事の事にて候ぞ。たいたうの天ぐのしゆりやう世界坊と申者、日本ゑわたり申て候。其ゆゑハ日本わ小国とハ申せども神国にて佛法はんじやうしてわういめでたき国と聞て、さあらハ世界坊が日本ゑわたつてきまたげ申さうとするとはや此どにきたり先あたご山ゑ参太郎坊に案内申されたれハ太郎坊出合給ひ候ところにかの世界坊先あたごの山のけしきを見て誠に山のやうだいちかごろ見事にて候。我等ごときの者のすまふする所にハ是にうゑこして有間敷とぞつとおほめ申されて、扱日本ゑ参る事よのぎにてもなし。我たいたうにおゐていわう山・しやうりうじ・はんにやたいにいたるまで我まゝにはからひ申に、太郎坊八日の本にありながら何とて我まゝにはからひ申されぬぞ。さりながら小国とハ申せども神国にて佛法はんじやうと聞てあれども神国なりとも何のきどくの有べからず。我／＼わたつてたいたうのごとく我たうに引入申さんと存、是まで参て候。同じくハ御心を一つにしてちからをそへて給り候へと申されけれハ太郎坊の返事に我らもさやうに存候へども小国といゝながら神国にてあれハさやうのぎいかゞな。さりながら是まで御出にて候間同心申さうする。先あれに見ゑたるハひゑい山と申てわうじやうのきぐわんじよなり。まづ／＼都へ御出有てそれよりひゑい山ゑ御出被成、心のまゝにうかゞひて御らん候へとてきつとたいさん申された程にそれより世界坊都にて我まゝに色／＼のきまたげをなし申

さるゝ間ちよくしたつていそぎ僧正に御出被成御祈禱あれとの御事にて候間僧正も御車をはやめ給ふ。されどもまづ少もはやく此くわんじゆをもちて参さゞげ申せとの御事により是迄出て候。いそいでもちて参らばやと存る。惣而か様の事を何とて我らの存る事にてなければどもよくしたつハ此子細にて有程にいそぎ参れとの御事にて候。なる程いそがばやと存る。誠に神国なれハこゝ百さいより此方佛法はんしやうにて何事も目出度御国にて有に世界坊のぶんとして日本のさまたげうと有事ハはらすかしな事にて候。ことに太郎坊などの日本の事をよくしられて今迄何事もれうじ成事をなされぬに世界坊申さるれハとて同心申さうすると有事ハ只太郎坊の是ハふんべつちがひかと存るよ。いや今つち風が吹てとおつたれハ身のけもよだつておそろしうなつたぞ。是もまのわざにてあらうする程にくるしかるまひ。いやくよくく見るにことのほかの大風にてゆくさがくらうなつた。是ハたゞ事ならぬけしきにて有よ。それがしがぶんとして世界坊とねじやう事ハなるまい。命をうしなふてハいらざる事たゞもどれ。さりながらもしお尋あらハ御存じのかたくハ此所迄参つたれどもゆくさがくらやミに成て見えぬと申てもどつたといふて給り候へ。其ぶん心得候へ。く。

(128) 《車僧》

か様に候者ハあたご山のかたわらに住居するみぞこゑ天ぐにて候、それがしもしいにしゑらくちうに住居仕候しが有時下京より上京ゑ参るとて大き成みぞの有をとんでとびすまして候程に我ながらやうとんだと存てじまんして候へハ、太郎坊のまんするところがにくいとおほせられて其まゝあたごゑつて御ざ有。それよりみぞこゑ天ぐとよはれ候。さる程に爰に車僧と申てたつといそこの御ざ有が、我程たつとい者わ有まいとじまんをいたされ候を太郎坊御存じ

有てたつとくハたつといまゝでいられいでもんするところがにくいと有てまだうへ引おとさうすると思召、折ふしさが野迄参らるゝ程に太郎坊きやくそうになつてさがゑ御出有。いかに車僧と先ことばをかけられた。車僧ハねそくと何事ぞとこたへられたところで、浮世をハ何とめぐるそ車僧まだわの内にありとこそそれとおほせられた。其時車僧の返事にうきよをハめくらぬものを車僧のりもうるべきわがあらハこそ。わもなし。我もないとこたへられた。其時太郎坊の其きならハ左様にいふ者ハたそと。是が又たそのわといふ物にて有げに候。たそとふにたらてとことを。たそのわハうさぎのみ、か。とびの尺八。是ハひでんだうに入たるほうもんにて候處に車僧くうだう風すゞしいと申たれた。時におふ。我名のミたかをの山にいふたつる人ハあたごのミねにすむか車ハなんぞくわたくのしゆつしやひくかめぐるかさわ候まい。承るまひ。なんどゝさまくもんだわれ候が太郎坊のちとうちだちになられて、我先我ハあたごゑ帰る。あれゑ御出あれ。今一度ほうもん申さうするとて御帰り被成た。我等がやうなるみぞこゑ天ぐにもさがゑ参車僧をなぶり候へとおほせつけられた程に是ゑ出た。車僧ハどこもにいらるゝぞしらぬよ。いや是にいらるゝ。扱もねそいかほかな。太郎坊のにくまるゝが道理じや。それがしもことばをかけて見う。いかに車僧く。是へいかな事、しゝのつのはちがさいた程にもおもわぬ物じや。たゞしみゝがとおいか。いやくそれがしがぶんどことばづめにハ成まひ。きやつをなぶつてまだうゑおとさう。惣而こそぐるほとめいわくな物ハない程にこそぐらう。こそくやこそくおかしいや車僧。はなのさきをねすミがこをおふてちよろくぢよろくやちやうく中くそれがしがぶんでハ成まひ程に太郎坊をよびいださうと存る。(ふし) いかにやいかに太郎坊く。

(129) 《大佛供養》

是ハ南都東大寺しゆんしやう上人に仕へ申能力にて候。去程にそれがし只今罷出る事よのぎにてもなし。当寺大佛でんじやうじゆ仕候ゑハ今日一だんの吉日にて有により御供養なさるべきとの御事なり。惣而大佛でんと申ハ忝も仁王四十五代しやうむ天わうのきさき光明くわうぐう去子細にて御きたうのためいせ大神宮へ一どのちよくしたち二どめにぎやうぎほさつ御出有て色くのきづい有て大佛でんをたて給ひて候がか程の大がらんハ三国一の寺にてあらうするとの御事なるを平家の大将清盛の御子三位のちうじやうしげひらのきよう其がらんを治承四年十二月廿八日にやきはらい給ふ。しかる所に源の頼朝大がらんをめつしたる事あわれと思召しゆんしやう上人おほせをうけて日本の事ハ申に及すたうど迄もくわんじんを被成大佛でんこんりう有。誠に御本尊の事ハ申迄もなし。四天二天迄もことくくじやうじゆ仕候御事一入めでたき事成ハ、今日吉日にて御供養の御ざ候間則頼朝の御ざ有べきとの御事なり。それに付しさい有間敷候へどもし平家のうちもさらざれどもこうげにかゝみいて頼朝をねらい申事有べく候間、だますに手なしと申事の候間ばんをかたく仕れとおほせ付られでハ候へども寺中にも其方いたし用心仕れとの御事成間其かくご仕よく心がけてばんをいたされ候へ。ゆだんをしてふかくをとり候などの御事なり。かまいて其分心得候へ。く。

(130) 《現在鶴》

か様に候者ハ源の頼正の御内に仕へ申者にて候。只今此所へ出る事よのぎにあらず。たのミ奉りたる頼正の御身の上に大事の事がいできて候。其子細ハたう三条のもりの方よりも夜半ばかりとおぼしき時分くろ雲が禁中へおほい候て御門おびる給ひ御のふしきりに有

し程に貴僧高僧をめされしゆくさまの御祈禱どもにて御ざ候へどもさらに其しるしなく候間くぎやうせんぎ有てうらなわせて御らん有べしとはかせをめしてうらなわせられ候へハ。はかせ参うらかたに引合申やう、是ハけしやうの者のわざにて候程にふげにおほせつけられいさせられたらハしかるべしと申上る間、さあらハいさせて御らん有べしとてたれか此けしやうのものをいつべき者や有とせんぎ有ていやたれと申ともけしやうのものを仕らうする者へハ頼正ならでハ有間敷と有て頼正のしたくゑちよくしたつてたう三条のもりのかたより夜半ばかりにきたるけしやうをいそいで仕れとの御事なり。頼正ハせんじかしこまつて候。さりながらうてきなどの事こそ候へ。めにも見ゑがたきけしやうのものを仕れとの御事ハめいくなれどもちよくしの事にて候間ぜひにおよはずかしこまつたと御うけを申されて夜に入しこう有てかのけしやうのものをいて御らん有べしとの御事なり。たのミたる御方は大事にかけられ此けしやうをいとおとさずハ二度人におもてむけまいとの御ないぞんにて候間か様の一大事ハ有間敷との申事なり。又我等の存るハ頼正の御てがらの程ハ存て有程にうさんにも御ざない。射おとし申されうするはうたがひもなければども心のたけきまゝにいそんじさせられたらハ御じがいをもなされうすると思召と見えた。只今申ごとくうさんにハなけれともしぜん御うんもきわまりたらハやつばがちがわうかと存て我等ごときの者迄もせんひをくうことにて候。我等も御やくにハたゝすとも此度の御供にはづれたらハくちをきこやうが御ざ有まひ程に御供に参らうすると存是迄出た。やい何と申ぞ。頼正ハ御供にハいのはやた只一人めしつれられ、へちの御供は無用じやとおほせらるゝと申か。是ハいかな事。扱ハぜひもない事じや。こゝろがけハ此とおりさながら御奉公に参らうすると存是

まで罷出て候間、御存のかた／＼ハのちにたのふだ人の御前にてそれがしも御供に参らうすると申て罷出たれどもたれもめしつれられぬと聞て罷歸りたると御申有て給り候へ。其分心得候へ。／＼。

(131)《羅生門》

か様に候者ハわたなへのつなの御内に仕へ申者にて候。只今は是出る事のぎにてなし。其子細わ源の来光雨中にてごとせんさのまゝいつものくつきやうの兵をあつめ御しゆゑんの被成ておほせ出され候ハ、都におゐて何かめづらしき事や有と仰出され候へば、保生の申さるゝ事ハ京わらんべのとりさいたすをきけハ羅生門に鬼神すんで日がくるれハ上下の者とおさぬ由を申されけれハ、たのミたる人申さるゝ事わ、御前にてごんごだうだんれうじ成事をおしやる物かな。たとへハ鬼神すめバとてかた／＼我らのやうなる者が是に有て住せておくべきか。日の本の内にさゑ中／＼左様の者ハすませておくまじきと存るにことさら都の内なとに思ひもよらぬ。れうじ成事を仰らるゝ物かなと申されたれば、保生扱ハそれがし御前にてなき事を申上たと思召ハ、今夜にてもあれ羅生門ゑ御出有ふしんをおはりやれとしが／＼しく申されけれハ、たのふだ人、扱ハゑ参るまい者と御らんじさだめられて左様に承候か。いまさら保生にたいしいこんハなけれども、たとひ鬼神すめハとて住せておけば一つハ君の御ためなり。ことにそれがしゑ参るまい者と御らんじかけられてかやうに仰らるゝと存候間、さあらハあれハ参りてやうすを見申さうする。しるしをたへとあつた處でまんざのしうも、是ハ無用と申されたれども来光つなの心中尤とおぼしめされやがてしるしの御札をいたされけれハ頼たる人うけ取て今夜羅生門ゑゆかるゝがなんぼうあらけなきさうるんにて御ざ候。かやうの奉公がかんにやうじや。我等が様成者も此度のふんべつがかんにようじや。そなた

がどゞめくハ何事ぞや／＼。はや頼たる者ハ出らるゝと申か。よく／＼しあんいたすにぜひと御供に参らいてハかなわぬ事じや。さりながら聞ハ一人もつれまいと仰らるゝと聞いた。是ハ我らがためにハ満足のいたりじや。かやうのあらそひの所ゑゆけハきもをつぶす事が有と聞た。されどもまづ／＼頼だる人の御尋候ハ、こなたへしらせて給り候へ。其分心得へ。／＼。

(132)《土蛛》

是ハ源の来光の御内に仕へ御申有ひとり武者の御内の者にて候。天下おさまり国とミ民もゆたかにめでたきおりからなれハ民百姓にいたるまで此御代をありがたく存候。しかる所に爰にすこしきづかいをいたす事の候。其子細わ此程来光の御煩にて御ざ候によつておの／＼いかゝ有べきとの御きづかいを被成候處にさきのよふしぎ成事の御ざ有たると申。其やうだいハ来光のぎよしなりたる御ざのまゑいづくのたれともしらぬさうぎやうの一人きたり来光の御こゝちわ何と御ざ有ぞととう程に、いかやうなる者ぞと思召、御らん候へば、何とやらん其さますさまじきかたちなり。是を御らんじて御みのけよだつて御こゝちあしく成候程に、いかやうなる者なれハわがそばへちかづくぞとおほせらるゝ其内に、ひたと御そばへよりすてに来光をとり奉んとするけしきさながらちゝうのごとく、はやいとをくりかくるやうに候程に、やがて御まくらもとにたておかれたるひざまると申御剣をぬきひらいてちやうどきらるゝところをおつはづいてにぐるをおつめてつゞけさまに二太刀三太刀きらせられたるほどに、いかやう成けしやうの者もたまらずにげうせて見ゑす候處にたのふだる人ぬからぬ御方なれハつねにこゝろのかけられたるやらん、其まゝ来光の御前に参り只今御こゑのきこゑ候程に参て候と申されしかハかくのごとくの子細にてありたると御物語被成候

間たのふたる人もきもをつぶし、ごんごだうだんのしさいにて候。其けしやうの者のにげたるあとをとぢめてのりを御らんすれハ大和国葛城山ゑのりを引たるとあつておのゝ葛城山ゑ御出有かの者をたいらげ申へきとてひとりむしや大将にて御出あらうするとしてこのほかもやう被成る程に我等がやうなる者ともにあいにこしらへをいたし葛城山ゑ御とも申さうすると存是迄出て候。みなゝいさしますか。(二三四人も出る。シカゝ) いやきどくにさうゝいてられた。扱よびいたす事へちのしたいにてもない。あぶない事があつたがおぬしたちハしらぬか。来光の御わづらいをしらうぞ。シカゝ。それに付てきどく成事があつたハ。シカゝ。此程来光の御ぎのまゑふしぎ成者が参りて御こゝちをとい申程に何者ぞと御尋なさるれハ、我せこがくべきよいなりさゝがにのくものふるまいかねてしるしもといゝ、なやミ給ふもわがわざのやうに返事を申たる間、はやけしやうと見給ふうちに御そばへひたとちかづき御ミをくるしめ申候間、御まくらもとにたておかれたる御劔をぬいてきらせられたる程にたまらずにけたるところゑたのふだる人御こゑをきゝつけて御出有たれハ委御物語被成た程に其のちをとぢめて御らんしければ、葛城山ゑひきたる間、おのゝかの者をたいらげに葛城山ゑ御出有と申がみなゝも御ともに参てよからうと扱よびいだして候よ。ようこそいわしまつたれ。此度其やう成所参らいてハくちが聞れうか。御ともものよういさしめ。さりながらけしやうの者ハ葛城山がすみかじや程に我い所へおつかけたらハいか程有とも物のかすにもすまひ程に爰がしあんどころで有。先それがしハ用の事が有程にめこともにあふてから又爰ゑこうぞ。先まで。やいゝめこともにあふたらハゑこまいぞ。はやもどつたハ。ごんごだうだんの事。とかくいたすうちにはや御出と申か、よくゝしあんをいたす

に。れきゝの中へ我等がやうなる者が参てもみかたのよわりにならう程にたゝ参るまい。引でハない。帰るぞゝ。

(133)《長郎》

か様に候者ハかんの国の長郎と申御方の御内に仕へ申者にて候。去程に只今はゑ出る事よのきにあらず。頼奉りたる長郎此程ふしぎ成事の候。其子細をいかにと尋るにほくやのかたわらにかむのとけうと申てつち橋の有。其橋に長郎あそびて御入候へハゆめのごゝろのやうにらうわう一人こまにのつてゆきあいばしやうよりくつをおとしいかに成じゆしあのかつとつてはかせよという。長郎何者なれハ、我にむかい、かくいうぞとおぼしめし、かの者をうたんとし給ふが、おひたるをうやまふハぶものごとしというごを思ひ出し、すなわちとつてはかせ御申有たれハ、又おといとつてくれよと申。それをもとつてはかせ御申有。かの者をいかやう成者ぞとおぼしめすにどけうのかみにこくじやうさんという山有。其山にすむ光石公と申者にて候が、長郎よにこゑきようだい一ひとにすぐれたる御方成ハ一まきあたへ申べき。其こゝろざしを見んためと聞ゑ候。其一まきと申はひやうはうのだい一とやらん申候が、それをさづかり給ハ、やがてていわうのしとなるべしとなり、其時かのらうわう申され候ハけふより五日にあたる日此所ゑきたり給ふべし。一大事をおしゑ申さうするとかたくやくそくをめされ候程にたのふだる人ハまことしからぬと思召せどもゆめうつゝにてもあらハあれ、らうわうとやくそくしていてぬハいかゞ成と有てそれより五日にあたる日どけうへ御出候へばかのらうわうハはらをたて我ハとくきたつて有におそくも来るものかな。なんじまことの心ざしあらハ又けふより五日にあたる日来るべしと、やくそくしてかきけすやうにうせ申され候間、長郎も今度ハけいめいに御出有て大事をさづかり給わふ

するとこの御事なり。是をさづかり給ハ、まつせ迄も名をかうたいにのこしおかるべき御事たいせつなる事なれハ此事じやうじゆいたすやうにとのきねんをもいたしかひのいじやう迄ハ御供申さすともほくやのかたわら迄ハ参るやうにとの心かけをミなく仕候へ。惣而人と成者もやすからぬことなり。かやうにきどくじんべんなる事にあひ給ふ事も御心しやうじきにしてじひをもつはらとし給ふゆゑなれハかゝるめで度事ハためしうきなきことなれば此度がせんにて有間、御とものお用意を仕り候へ。かまいて其分心得候へ。く。

(134)《二人祇王》

御前に候。かしこまつて候。やれく只今の佛御前と申ハかゝの国佛の原と申所よりいでられたる白拍子なるが、年ハ十六七なれどもむかしよりいまにいたる迄おほくのあそび物の有つれどもやうがんびれいなる女のこゑよくていまやうをうたひまひの上手是程の女ハきやういなかにも有まいとらくちうの人く上下こぞりて是をもてなし申程に、佛思ひけるハ、たうじ時めき給ふ清盛こうに参らざる事こそほいなけれ。あそび物のすいさんハ何かくるしかるべきとて当所西八篠に参しに入道殿のおほせにハさやうのあそびものハ人のめしによつてこそ参候へ。かれめさぬに参るすいさんハしかるべからず。神にても佛にてもあれかし。祇王かくて有うゑハかなふまじいとおい出させ給ふ。佛ハすげなきおほせをかうむり罷出けるを、只今祇王くハしく申され候によりめし出れしが、清盛公佛に御心うつりたるとミゑて候により、祇王の御うらみかと思ゑて御ざ有。惣而白拍子と申者のはしまりハ鳥羽の院の御時、鳴の千歳、和哥のまひ二人の女すいかんにせいがうの大口をき、ゑぼしきて刀をさして舞けれハ、おとこまひと名付られたり。中比、刀ゑぼしをのけられて白きすいかに大口ばかりにて舞けれハ白拍子と名付けら

れたると申。去程に祇王ハかくれもなき見めかたち人にこゑ、心ばゑよけれハ、清盛公御ちやうあひ被成候によつて京中の白拍子聞うらやむ程にとりいられておかれたりけるが、いまのやうだいを見るに入道殿ハ佛に御心うつりたると見ゑて候間、大かた祇王ハすてらるべきかと存候。いやしやうぞくめされ候へと申さうするにて候。いかに祇王・仏もしやうぞくめされ候ハ、いそいで御出あれとの御事に候。其分心得候へ。く。

(135)《守久》

扱もきどく成事かな。只今の守久の御事ハ中くきもつぶしたるやうだいな。只かりそめに御らんぜられたる御方ハ太刀どりのおちどにてもあらうすると思召れうするが、さやうにも御ざらぬ。其わけハあれもすどの事をせられたるおほゑの人にてわたり候により、守久ハ大事のめしうとにて有と申され、念を入れていまの御方に申付られて候間、是もつて太刀どりのふかくにても御ざない御事なり。何としたる事ぞ。我等がやうなる者のふんべつにハあたわぬ事じや。あゝげにもくいま思ひ出したる事の候。守久ハ清水の観音をごしんがう被成、つねにあゆミをはこばれたると申が、今にいたる迄、毎日観音をよませらるゝと申程に、たゞ清水の観音の御はからいらて御ざあらうする。つねの事にてハあるまじい。太刀をとりにおとされたるばかりにてもなふて二つばかりにおれたると見ゑて候。かやうのためしうきなき事ハ有まじいかと存。いかに申。扱もく只今のやうだいハきどく成事にてハ御ざなく候か。我等もか様にふしぎ成事ハ今迄聞も及す候により只今も我等のひとりことに申にハかりそめに御らんじたる御方ハ太刀どりのふかくのやうに思召れうするが、大事のめしうとなれハ、念を入させられ、よき人におほせつけられたる程に、太刀どりのとがにても有まいとの申事

にて候。ことさら取おとしたる御太刀か二つか三つかにおれたる程につねの事にてハ御ざ有まひ。たゞ佛神の御はからいにてあらうするかとの申事にて候がたゞし何と思召候ぞ。かしこまつて候。扱もく目出度御事かな。いのちをたすけさせらるゝさゑあらうするに御前ゑめしいださるゝとの御事ハ、とかく守久という御方はいのちづよいくわほうなる御方にて候。急で参、御前へ御出有やうに申さばやと存る。いかに守久へ申候。ゑぼしひたゝれをめし急で御前へ御参あれとの御事にて候。やがて御参候へや。

(136) 《橋弁慶》

あゝかなしやたすけい。あゝなふ。やいおぬしハ何としたぞ。やい。いやそなたハ何として是迄出たぞ。それがしハ清水へ用の事か有てゆくがわごりよが取ミだしたなりを見てはしりついたが何事にあふたぞ。扱くこわい事にあふた。物もいわれぬ。かまいて五条の橋をとをらしますな。子細が有ぞ。それハ何とした事ぞ。それがしハ用の事が有て五条の橋をとおつてあれば年のころ十四五かとも見ゆるわかしうか女かそれ迄しかとハ見ゑなんだがいづくからでたやらきぬをかついてひらりとする其ひやうしにこりのやうなる太刀をするりとぬきそれがしをめぐけてかゝる程にきもたましいもなふても、きらるゝかゝと思ふてにげのびてきたが、扱もあまのいのちをひらうた。あれにたつハ五条の橋で人をきるといふ事は聞もおよばなんだか、おそろしい事にあふたハ。いや内々のとりさにハ五条の橋で千人ぎりをするとりきたしたれどもまことでハ有まいと思ふたが、扱ハさやうの事があつたよな。それがしも凡聞てハあれどもいまのよにさやうの事をする者ハ有まいと思ふてうつかとしてをつたれハすでにきられうとしたがそれがしがあしがはやうてにげのびてきた程にもはやみどもが命

は五百八十年ハおんでもなふいきやうと存るよ。あふおぬしがいうごとくにも、はやわごりよの命ハながからうぞ。扱あのやうな者をたれなりとも五人か三人かあとゝさきにわかつてうちころいて、ゆきとをりのとがない者をゆるりとをさいでな。それもしれまいぞ。又けなく者もよにハおほい程に、どこぞでハそれもうちころされうぞ。心やすうおもハしめ。なふこやうハいうが何とやらせなかうづくかと思ふか、見てくれさしめ。なむさんほう、おもふまゝきられて有ハ。あゝかなしやなふ。やいこいまのハざれことじやぞ。ちつともきづハないぞ。わこりよはよいきもをつぶさしたなふ。いやくとかくしあんをするに、こゝにいる所でハない。それがしハ先のくぞ。やれまづまてやい。なむさんほう。はやかゑつたよ。いやくそれがし一人爰にいらハ、あとをしたうてくる事があらう。もしさやうの事があつてきられてハいぬじにじや。ながいしてひきめをおふ事が有物じや。とかくやすらう事ハ大事じや。それがしハ急でしたくへ帰らばやと存る。たゝのけ。

(137) 《大原御幸》

御前に候。かしこまつて候。皆々承り候へ。大原へ御幸なさるべきとの御事にて有ぞ。皆々罷出て道をつくり其きよめをも仕れとの御事にて候ぞ。其分心ゑ候へ。

(138) 《鉢木》

御前に候。かしこまつて候。扱もきやうがつた事をおほせつけられた。されども御ぢやうにて候程に見申さばやと存る。扱も見事な事かな。馬・物のぐにいたる迄、いづれをいづれと申さうやうもないけつかうな事じや。此なかに一人もぶきれいなむしやハ見ゑぬ。やれくさもふしや。是ハいかな事。是程見事なむしやのなかへあのやうなるぶきれいななりで出られた事じや。是程さも

しいていハもはやべちにミゑぬ。うたがひもない。此人であらう。いかに申。御前へ御参されとの御事にて候ぞ。しかとかた／＼の事にて候べし。ちぎれたるはらまきをき、さびたる長太刀をよこたへ、やせたる馬をぢしんひかへたるむしや一つき有べし。それをめして参れとの御事にて候。則にかいだうの承にて候間、とう／＼御前へ御参候へ。(はしめ) なふいそがしや、只今此所ゑ出る事よのきにてなく候。すなわち西明寺殿ハ天下のよしあしを御ぞんじなされんがためしよくをしゆぎやう被成たると申がはや此四五日いぜんに御かゑり有て、何としたる御事やらんくわんとう八しうの大名小名こと／＼くもの／＼ぐしてかまくらゑ御参あれ。おほせつけらるべき事の有とふれさせられ候。則にかいだう承りにて候があまり諸軍ぜいおそく候程に何とおそなわり給ふぞ。いそぎ御参あれとの御事にて、はやいづ・さがミへハ人をつかわされたる間、のこり六ヶ国の我等に仰付られはやく参候やうにとの御事なり。急で参らばやと存る。何と申そ。是へ御参有がむさしの御人数と申か。先ハはやい事。急で御参候へ。一だんときれい成御事にて候。あれへ見ゑたるが下総の御人数じや。やれ／＼きれい成事かな。おそいと御事にて御ざ有ぞ。御急ぎ候へや。是へ見ゑたるが常陸の国の御人数か。扱／＼見事な事。や、中にも是ハ一たんときれいに候よ。急で御参あらうするにて候。又是なるか下野の御人数じや。是も見事成事かな。きれいさ申もおろかな事じや。是ゑも参に及ぬ。あしがたすかつた。やあ是か上総の御人数じやと申か。やれ／＼見事やな。是ハ又一入きれいに見ゑて候よ。いまた上野の御人数が見ゑぬ。急で上野ゑ参う。何と是ゑ御出有が上野の御人数か。やれ／＼うれしや。はや参るに及ぬ。是も今迄のおとらぬ見事成事じや。いづれもいづれと申さうするやうもない。たゝ帰りてハせんもない。もは

やこと／＼我等の承りたる六ヶ国のふんハ御参候間、御人数よりさきゑ参申さうする。ミな／＼御聞候へ。はやくわんとう八しうの諸軍ぜいはゑ御付被成候ぞ。其分心得候へ。／＼。

(139) 《桙狩》

(女) やれ／＼見事な桙にておりやします。此所ハ一入面白き所成ハひやうぶをたてまくなどをうちまわいてミな／＼くこんをこしめせや。たれにておりやしますぞ。あれにたゝせられたるハ何と申御方にておりやしますぞ。そなたハあれもちにてもこれもちにてもおりやらしませ。こなたハたゝ去御方とばかりお申しやれや。是ハやわた八幡宮に仕ゑ申たけうぢと申末社の神にて候。只今是ゑ出る事よのぎにあらず。よごの將軍たいらのこれもち、信濃の国とがくし山ゑわけいられ候により、我等もとがくし山ゑ参んと存、出て候。其子細ハとがくし山に鬼神すみて国土の民をなやまし候間、これもちの方ゑ勅使をたてられ鬼神をたいらけよとの御事にて候間、かしこまつたと御うけを申され、とかくし山ゑわけいられ候が、大かうの成人ハ鬼神をたいじすべき事ハ心にかけもせで、先道すがら山／＼の桙を見て、しかなどをかり、ゆふ／＼なるていにて下られ候處に、鬼神此よしを聞、かのこれもちをたぶらかいて命をとらうするとして、と有所のいわをのすぐれて面白き所にびようぶをたて、ならびにまくなとをうちまわひてしゆゑんをいたし、これもちをまちかけ候處に、これもちたぶらかすとハゆめにもしらす、かのていを見ていかやうなる御方ぞとてつかひをたてられけれハ、たゝさる御方の桙がりとばかり返事を申。是持きいて、よし／＼いかやう成人なりとも上らうの、道のほとりの絶がりならハ、かた／＼のりうちかなふましいとて、馬よりおりてひそかにとをられけるを、かの女出て、一つきこしめせとて袖をひかゑ候。見れハうつ

くしき女なり。たぶらかすとハゆめにもしらす、其まゝとめられさけをのむ程に、しやうたいもなくたべいせんごもしらすふし申さるゝ。じこくうつらハかの鬼神ともとらんとするを八幡大ぼさつ御存し有て、さすがのこれもち程の人を鬼神にやミゝととらせてハいかゞと思召、急たけうぢにたちこゑ此由をつげしらせよとのしんちよくをうけて、じんづうをゑ、せつなが間に是迄参て候。かのこれもちハいづくにいらるゝぞ。さればこそ是にいられ候。あら心やすや、今迄ハつゝがもないよ。急で神ちよくのとおり申さはやと存る。いかにたいらは是持たしかにきゝ給ゑ。さきにうつくしき上らうの御ミをとめさけをしいたるハ人間にてわなし。此山の鬼神とも御身をすすめ、よいふしたるところをかの鬼神どもとらんとするをやわた八幡大ぼさつ御存し有ていそぎたけうぢにたちこゑ此由をつげしらせ候てかの鬼神をたいらけさせて上落させよとの神勅をうけ、たけうぢ是迄参たり。則八幡宮より此御はかせを下さるゝ間、是にてやすゝと鬼神をたいらげいそぎ上落有べし。あらしやうだいもなのていや。とうゝめをさまされ候へ。ゝゝ。

(140) 《鶴亀》

是ハもろこしげんそう皇帝に仕ゑ申くわん人にて候。まことに此君けんわうにてましませハ、ふく風ゑたをならさす。たミとゞしをさゝす。めでたき御代にて候。去程に此君四きのせちゑのまつりごととおこたらずおびたゝしき御事なり。則春もぶがくをそうして、たんしやうの千年の鶴、万歳のりよもふの亀迄、もまいあそび申めてたきまつりにて候。おなじく今日も月宮殿ゑ参内申され候へ。其分心得候へ。ゝゝ。

(141) 《皇帝》

かやうに候者ハもろこしたうのげんそう皇帝に仕申くわんにんに

て候。この君けんわうにてましますにより、ふく風ゑだをならさす。民とゞしせず。まことにめでたき御代なり。去程に此君の御ちやうあいのきさき三千人御ざ候。中にも楊貴妃と申す御方ハならびなき御ちやうあひなるが此程御のふにてましますによりいかゞ有べきとの御きづかいにて今日ハ此でんゑぎやうがうなり楊貴妃の御きしよくをゑいらん有べきとの御事なり。ミなゝゝ此でんゑ参内申され候へ。其分心得候へ。ゝゝ。

(142) 《鞍馬天狗》

か様に候者ハ、此鞍馬寺西だに僧正に仕へ申のふりきにて候。当寺におゐて毎年花のころハ西だに東だにばんにいたいて花をいたされ候。当年ハ西だにのばんにて候間、東だにのしうおのゝに御出有て花を御覧あれとの御使に参る。はや是ゑ御出にて候。西だにより御使に参りて候。則是にお文の候。御らん候へ。御前に候。かしこまつて候。いかに申候。あれにきやくそうの御入候が、当山におゐてたさんのともがらさんくわいハきんぜいにて候程に、いそぎおつたて申さうするか。いゝやあれさへたゝハくるしう御ざない物を。扱もゝもはらのたつ事。や、是程しうだおざしきをさますハあのかやくそうゆゑじや。おれがまゝならハ是をいたゞかせう物を。是ハ鞍馬のおくそうじやうがたに大天狗にて候。只今此所ゑ出る事よのきにあらす。其やうだいハ当山におゐて西だに東だにと申て寺の候が、毎年春にもなれハ、ばんにして花見をいたされ候ところに、当年ハ西だにのばんにて候が、此ころさかりなると有て東だにのしうミなゝゝ申入、しゆゑんをなし申され候を我等が頼奉り候大天ぐ面白く思召て、さらハそとのぞかうするとて、きやくそうにて見物被成候ところに、のふりきか見付、当山におゐてたさんのともがらさんくわいきんぜいにて有に、是成きやくそう思ひもよら

ぬ事なり。おつたてうか、引たてうかなんども申ところにて、いんじゆのぼう申さるゝハ、当山にて山伏わ子細有程にしよせんおくの花を御らん候へとて、おのゝおく多御出有た。其あとにしやなわう殿たゞ一人しよぼゝとしてのこられた處に、大天ぐおほせられこゝにハ、何として御身一人是にのこり給ふぞとおほせられたれハ、しやなわう殿のおいたハしや、さん候只今の少人たちハ平家の一門、中にもあきのかみ清盛の子ともなるによつて一寺のしやうくわんたさんのおぼゑよく候が、みづからわ同参にハ候へどもよろづめいりやうあれとおほせられ候へハ、大天狗あらいたハしや御身と申ハ源家のとうりやうにてましますぞや。先こなたへ御出候へとて、御とも有。其まゝひたとうちこまれて、花を御らん有度ハ見せ申さんとて、それよりあたご山、高尾、吉野、初瀬、こゝかしこの花を見せ申されぜひと兵法をつたへ平家をうたせ申べしとおしへ給ふ程に、きようにハ有、はやかうがいぐれのこのはぐれ、のきりのゐんのなど、申大事迄御つたへ被成た。しかる所に今日ハ我等が様成このは天ぐにも罷出てしやなわう殿の打太刀を仕れとの御事にて候間、先いそいで出て候が、我等こときの者ハ見ゑぬか。爰なわごりよハ何とておそく出たぞ。それがしハというてたにぬかつた事じやな。扱しやなわう殿の打太刀がならうか。いやゝやうたいを聞にしやなわう殿のあいてにならうやうな事でハないが、おぬしハまだゑしらぬ物じや。まことにおぬしがてがらをいふが、それ見よ其様にぬかつて打太刀かならうか。たのふだ人のかうがいぐれのこのはぐれのなど、申大事をつたへさせられたるが、しやなわう殿のあいてになつてしたゝかうたれう迄。やつとまいつたやつとな。いやゝ其ぶんにてハ中ゝなるまひ。それならハいなふ。

きたのかぎりをいわします。先までゝ。やいゝ、はやかゑつた。あれなりともだまいておこう物。それがし一人してハ何ともなるまい。しがゝしい事をいたいた。いや出て打太刀をいたせとおほせ付られたるに出ぬもいかゞにて候が、されども此分にて帰れハ出たも出ぬもしれまい。とかくそれがしハ打太刀に参る事なるまい。出たるしるしにしやなわう殿をよびいだし申さう。いかにしやなわうどのゝ。

(143)《夜打曾我》

あゝかなしや。やれゝやれたすけいたすけい。なふおたすぎやれゝ。なふあゝかなしや。たすけいゝ。あゝ。たれぞ。おぬしか。やい、何事ぞ。たれもあとにハ見ゑぬ程に、もはや大事ハ有まいぞ。なふ物がいわれぬ。まづいきをつがせてくれさしめ。何事じややい。あゝ扱もあふない事にあふた。何事にあふたぞ。かまいて用心をさしめ。人のとぎをするともしあんして、めをあいてせう事じやぞ。先子細ハ、さためておぬしたちもきゝおよぼうぞ。曾我兄弟の事よ。其おこりハ、かわづ殿ハ赤沢山のかりくらにてむなくならせられたるを助経こそおやのかたきなりとてとしごろねらい申さるれども、今迄うつ事もならなんだ。助経かれらにうたれてハふかくなりと思ひ、かたのごとく用心してそれがしがやうなる者もそばにおゐてたのもしい人じや。かんじんのやくにたつてくれう者じやとて、へんしもそばをはなさすときにおかれた程に、それがしがいふ事わ、人おほくとも我等一人ときをしているならハ、百き二百きにわまさうする。さりながら曾我兄弟がふんとしてかたゝをねらう事、何程の事あらうするぞ。中ゝにおよびもない事じや。しかれともかれら兄弟ハ身をすつる者にてすきまをねらうとミゑた程に、ゆだんハ被成ぞ。しぜんよそにての事ハいさしらす。かたゝ

の手にかくる迄も有まいというたれハ、助経もよろこぶで、そなたハたのもしい事をいう人しやと申されたるが、ことさら此ころハちうや用心してねまをもかゆる程にして、それがしをもそばおはなさすおかれたところに、難方大事のことじや。かの兄弟が何としてかしのび入て、さすがの者どもじや。ねたるところをきるまひと思ハれたるか、ことはをかけて、我等をかたきにもちながらゆだんしてさやうにねる物か。おきあがれというたところで、助経も心得たるとて、刀をおつとつておきあがりさまにはやりきつた程に、それがしも刀をおつとつて大藤内是に有やといわうとするところを、二人ながらきつてかゝる程につねのくわごんも、やくにたゝいで、やうくはいもつて是迄にげのびたるが、扱くあぶない事でハなかつたか。あしがひりめいていたいが、にげしりがきられてハないか見てくれさしめ。南無さんぼう。いかひ事きられて有ハ。あゝかなしや。しなふかな。いや心やすく思へ。きられハせぬぞ。まことに大事ないか。中く。こゝな人ハまたきもをつぶさせた。是をかたるハおぬしたちもようきいておいて、いらいに人のとぎをさしめという事よ。おぬしハおびさへせぬか。其事よ。おびをするひまがあるうとおもハしますか。おぬしがもつたハ何じや。いやまことにこれハ刀をとつてきたと思ふたれはよいにふいたしやくはちじや。おぬしも此やうな事ハほめさしめ。さのミうるたゑなんだ。おびまで取て出た程に、先人めがはつかしい。おびをしてくれさしめ。ひとりさしめ。いや手がふるうて中くならぬ。さらハおびしてやるぞ。あゝくわぶんな。此おんハわすれまいぞ。又おとことという者（ハ）心中が大事じや。それがしもかんしんのことばをつかふたぞ。にけさまに今夜のようちハ曾我兄弟なり。かまいてごにちにあらそひ給ふな。其せうこ人ハ大藤内にて有ぞというたハやい。いや

大藤内、曾我兄弟が是ゑきつてくるという程にそれがしハのごぞく。それわまことか。はや是ゑおつかけてきたハ。やれたすけい。こしがぬけたハ。なふきるハ。なふあゝかなしやく。

(14) 《大会》

か様に候者ハ、あたこ山大天狗に仕へ申このは天ぐにて候。只今是ゑ出る事よのぎにあらず。いや爰なおぬしたちハ子細をしつて出たか。子細もしらいで出たか。子細ハしらねども、先罷出よとおほせつけられたるによつて出て有よ。それハちかごろの心がけじや。何時もおほせつけられたる事があらハとう出たがよい。子細をしらすハ語てきかせう。まつたのふたる人の、さまをかへてゆさんをめされうするとして、とびになつてとびまわり給ふところに、都東比院のあたりにて山ぐものゑにかゝつておちられたを、京わらんべどもがとらゑて、ねちころさうと申者も有。いやたゞいきながらはねをむしれという者も有。たのふだ御方もなんぎせんばんに及給ふところに、ひゑい山の僧正の御とをり有てそれを御らんじ、いかになんぢらそれをはなせと仰られた。おさない者どもハ我等がつかまへた物じや程にはなすまひというたを。さらハ此あふきをとらせう程にはなせとおほせられた。いやく其ぶんにてハはなすまいと申程にそれならハ此しゆすをとらせう程にはなせと仰られたところで、そこでかしこまつたというてはないた。たのふだ御方ハよろこぶであたごゑ御帰り被成、やがてきやくそうに成、僧正ゑ礼に御出有て。われすでにみまかるべきところに、御たすけ忝存候。此へんに、何にても御のぞミの事候ハ、かなへて参せうと御申候へハ、僧正御存じなき由仰られた程に、都東比院のあたりの事にて候。さだめて思召あわせらるゝ事のあらうすると仰られけれハ、僧正やがてすいりやう有て此よののぞミさらになし。天ぢくりやうじゆせん

にて釈迦のせつほう被成たる所をもくぜんにまなふて御見せ候へと仰らるゝ。たのふだ御方も一大事の事にて候へどもさらハまなびて見せ申さうすると御申有て、其まゝ御帰有。御せつほうの時ハ佛たちがおほく入程に、このは天狗どもも罷出、佛になれと仰られたる程に罷出たるがみなゝも其ぶんか。中ゝ其とおりのや。いざおつつけだんかういたさう。何に成てよからうぞ。身どもハにわうにならうかとおもふ。それハわるからう程にあまのじやこにならう。いやゝあまのじやこにも佛にふまへられてめいわくにあらわしめ。おかしき天狗よりあひて。ゝ。何佛にならうやれと、だんかうするこそおかしけれ。あたこのぢざうにゑなるまい。大ミねかつらぎハほうきぼさつ。是また大事のぼさつなり。よくゝ物をあんするに。だうのすミなるひむずるにならんとミなかミきぬをこしらへて、みなかミきぬをぎつれゝて、こそりゝとはいひり。

(145) 《舍利》

安内とハいかやうなる人にて候ぞ。それかしお舍利をもち申者に候が、れうじにハおがませ申さす候へどもお僧の事にて候間、それがしの心得をもつておがませ申さう。かうゝ御とおりの候へ。是こそかくれもなきお舍利にて候。心しづかに御おがミ候へや。扱もいまのハ何事であつたぞ。たゝことならぬなりやうであつた。まづお舍利多参り、むねのだくめきをなをさう。是ハいかな事。お舍利の御見ゑない。何者が取てうせたぞ。いや思ひ出した。さいぜんしらぬそうがお舍利をおがませてくれよというた程に、おがませたが、きやつがとつた物であらう。扱ゝにくひ事かな。いづくゑにげたぞ。しらぬ。いや爰にいるぞ。なふゝお僧、お舍利ハ何とめ

されたぞ。何ともしらぬとおしやるか。いやそなたのしらぬとおしやらうとまゝよ。さいぜんよりれうじにおがませねども、お僧の事しや程にそなたにハおがませうというてよの者にハおがませ申さぬ程にかたゝのおしりなふてたれがしらうぞ。此うゑしらぬとおしやらうとまゝよ。しらせ申さう。中ゝおしりやらいでかなふまい。急でおしやれ。それハまことか。扱ハ只今したゝかになつたわあそこをやぶる時になつた物であらう。か様の事ハ存ぜず、とがもなきお僧をうたがふてめんぼくも御ざない。只今おほせらるゝに付、思ひ出した。むかしもか様の事の候。先当寺のお舍利ハ忝もしやくそん御にうめつの御時、そくしつきというおにがむかふばを取てこくうにうせ申ところに、佛弟子たちいかゝあらうすると仰らるゝ處に、いだてんと申てはやく佛の候が、かのおにをおつめとりかへし有て、色ゝの子細有て当寺へわたりたうど天ぢくわがてう三国にかくれなき佛舍利の事にて候。それがしのすいりやうにハ、又いにしへのそくしつきがしうしん人間にばけて佛前にちかつき、お舍利を取てうせたと存候。扱はハ何としてよからうするぞ。御僧もそと御しあん有て給り候へ。それハでんにて候。むかしわ左様の事もまのあたりに御ざあらうするが、今はぢよくせなれハ左様のきどくもあるまじきと存るが、たゞし何と思召候ぞ。けに是ハもつともにて候。いにしへもいまも佛力のかわる事あるまじく候間、おつつけいだてんにきねんをいたし二度お舍利をとりかへし申さうする間、お僧も力をそへて給り候へ。けに今とても佛力神力のかわる事ゆめゝあるべからず。一心負乱万徳円満釈迦如来依心舍利を韋駄天取返し給ひ二度当寺のたからとなし給へ。南無韋駄天ゝ。そうじて当寺のお舍利の有がたき子細をいかにと尋るに、忝も釈尊御にうめつのきざミきんくわんいまだひらかざる時、そくし

つきといふ鬼神ひそかにそうりんのしたにちかづいて御はを一つひつかいて取。佛^{ぶつ}弟子^{しし}おどろき、とゞめんとし給ひけるにかた時が間に四まんゆじゆんをとびこゑてしゆミのなかばしわうでんゑにげのほる。いだてんおつつめうばいと、其後かんのだうせんりつしにあたゑられしより此かた、さうじやうして我がてうにわたせしに、さがの天王の御宇にはじめて此寺にあんじし給ひ、たいせいせそめつごより今にいたるまでぶつにくなをとどまつてひろく天下にふする事あまねし。さあるによつて今のよにハ、当寺こそぶつざいせにて有と申すハ此子細にて御^ござ候が、それがしのすいりやうにハ、又いにしへのしつきがしうしん人間にばけ佛^{ぶつ}前にちかつきお舍利を取てうせたと存候。扱^{さく}是ハ何としてよう御^ござあらうするぞ。我等がふんべつにハあたわす候間、お僧もちと御^ごしあん有て給り候へかし。(せりふ右のごとく也。)

注

- (1) 『国書総目録』第六卷 岩波書店 昭和四四年四月発行 四六一頁
- (2) 拙稿『椋山女学園大学研究論集』第四七号 人文科学篇 平成二八年三月発行 一一一九頁

補記

貴重な間狂言本の閲覧・翻刻を許可下さった和泉流狂言方佐藤友彦師に心より感謝いたします。本稿は平成28年度科学研究費助成基盤研究(C)「東海地域近世・近代能楽資料の収集・整理とデータベース化」(研究代表者:飯塚恵理人、課題番号:23520256)による成果の一部となります。

* 文化情報学部 文化情報学科